# 令和７年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

| 重点目標 | 具体的取組 | 評価の観点 | 達成度判断基準 | 集計結果 | 分析 |
|---|---|---|---|---|---|
| １　基本的な生活習慣の確立（挨拶の励行、規範意識の確立、清掃の徹底） | ①　教職員が率先して挨拶に取り組み、礼儀正しく、元気で活発な生徒を育成する。 | 【満足度指標】（保護者）<br>挨拶練習、挨拶週間の取組により、すすんで挨拶する生徒が増えている。 | 生徒がすすんで挨拶していると思う保護者が<br>Ａ　９５％以上である。<br>Ｂ　９０％以上である。<br>Ｃ　８５％以上である。<br>Ｄ　８５％未満である。 | Ｂ<br>１２月の教育活動に関するアンケート<br>（保護者）９０％ | 生徒指導課<br>７月（中間）は９２％であり、数値はやや低下したものの、生徒会や各部活動による挨拶運動もあり、比較的高水準で保たれている。保護者の学校評価アンケート自由記述欄には「生徒さんのすれ違う時のご挨拶が爽やかで気持ちがいいです」という回答も得られた。 |
| | ②　服装容儀の指導を徹底し、生徒の規範意識の向上を図る。 | 【成果指標】（生徒）<br>生徒自身の意識が高まり、服装容儀・頭髪やマナーなどの向上に努めている生徒が多い。 | 積極的に服装容儀・頭髪やマナーなどの向上に努めた生徒が<br>Ａ　９５％以上である。<br>Ｂ　８５％以上である。<br>Ｃ　７５％以上である。<br>Ｄ　７５％未満である。 | Ａ<br>１２月の教育活動に関するアンケート<br>（生徒）９７％ | 生徒指導課<br>一昨年度からＡ評価となり、今年度も維持となった。頭髪服装検査は年間７回実施しているため、日常的に意識できていると考えられる。今後、登下校時における服装も意識を高めるよう取り組みを考えたい。 |
| | ③　規則正しい家庭生活を送るよう指導することで、遅刻する生徒を減少させる。 | 【成果指標】（生徒）<br>生徒の総遅刻数を過去５年間の平均と比べて減少させる。 | 総遅刻数が過去５年間の平均値と比べて、変化率が<br>Ａ　１０％以上の減少である。<br>Ｂ　１０％未満の減少である。<br>Ｃ　１０％未満の増加である。<br>Ｄ　１０％以上の増加である。 | Ａ<br>１２月までの遅刻調査<br>（生徒）<br>２１．２％減 | 生徒指導課<br>遅刻者数は大幅に減った。昨年度末の遅刻防止週間や登校指導実施等の理由は考えられるが、欠席と早退が増加している。生徒数や社会の状況が変化しているため、評価の観点についても検討したい。 |
| | | 【成果指標】（生徒）<br>遅刻をしない、遅刻を減らすように努めている生徒が多い。 | 遅刻をしない、減らすように努めている生徒が<br>Ａ　１００％である。<br>Ｂ　９０％以上である<br>Ｃ　８０％以上である。<br>Ｄ　８０％未満である。 | Ｂ<br>１２月の教育活動に関するアンケート<br>（生徒）９５％ | 生徒指導課<br>７月（中間）は９６％であり、数値はやや低下したものの、Ｂ評価となった。多くの生徒については時間を守る意識が定着している一方、一部の生徒については個別の支援等が必要であり今後の課題である。 |
| | ④　清掃の徹底により、学習環境の向上とさわやかで心豊かな学校生活の実現を図る。 | 【成果指標】（生徒）<br>生徒自身の環境美化への意識が高まり、整理整頓に努める生徒が多い。 | 積極的に教室内の整理整頓に努めた生徒が<br>Ａ　９５％％以上である。<br>Ｂ　９０％以上である。<br>Ｃ　８５％以上である。<br>Ｄ　８５％未満である。 | Ｃ<br>１２月の教育活動に関するアンケート<br>（生徒）８７％ | 保健相談課<br>７月（中間）は８９％であり、数値はやや低下したものの、多くの生徒が教室内の整理整頓に意識をもって取り組んでいる。清掃活動を通して環境美化への意識は概ね定着しており、学習環境の維持・向上につながっている。今後は、取組の意義を改めて共有し、継続的な意識の向上を図っていきたい。 |
| | ⑤　生徒の良好な人間関係づくりを支援して、いじめ等を防止し、不安なく充実した学校生活を送れるようにする。 | 【満足度指標】（生徒）<br>学校生活が充実している、楽しい、と感じている生徒が多い。 | 学校生活に概ね満足している生徒が<br>Ａ　８０％以上である。<br>Ｂ　７０％以上である。<br>Ｃ　６０％以上である。<br>Ｄ　６０％未満である。 | Ｂ<br>１２月の教育活動に関するアンケート<br>（生徒）７８％ | 保健相談課<br>７月（中間）は８２％であり、数値がやや低下してＢ評価となった。生徒理解と人間関係作りに努め、今後も生徒の様子を見守り、声かけを更に行い、生徒が不安なく生活できるように支援していきたい。 |

| 重点目標 | 具体的取組 | 評価の観点 | 達成度判断基準 | 集計結果 | 分析 |
|---|---|---|---|---|---|
| ２　授業の工夫・改善と生徒の希望進路の実現。（やる気を高める授業の実践、GIGA ｽｸｰﾙ構想の推進、体力の増進、生徒の進路意識の向上） | ①　教材・教具や指導方法を工夫して生徒の興味・関心を引き出し、やる気を高める授業を行うよう授業改善に努める。 | 【成果指標】（生徒）<br>授業において、生徒の興味・関心を引き出し、やる気を高めるため、ＩＣＴ機器の活用や授業方法の工夫を積極的に行う。 | わかりやすく学習意欲を高める工夫が感じられると答える生徒が<br>Ａ　９０％以上である。<br>Ｂ　８０％以上である<br>Ｃ　７０％以上である。<br>Ｄ　７０％未満である。 | Ａ<br><br>１２月の授業評価における肯定的評価<br><br>（生徒）９３％ | 教務課<br>７月(中間)は９３％であり、今回はその結果を維持してＡ評価となっているので、良かったといえる。成果指標として掲げたＩＣＴ機器の活用や授業方法の工夫が一定の成果を上げ、多くの生徒に効果的であったと考えられる。来年度以降は生徒への工夫をさらに広げ、意欲向上を図ることが課題である。 |
| | ②　ＧＩＧＡスクール構想の推進を図る。 | 【成果指標】（教員）<br>平常の授業、ホームルーム、部活動等での活動でクロムブックを有効に活用している。 | 生徒がクロムブックを有効に活用できていると答える教員が<br>Ａ　８０％以上である。<br>Ｂ　７０％以上である<br>Ｃ　６０％以上である。<br>Ｄ　６０％未満である。 | Ｃ<br><br>１２月の教育活動に関するアンケート<br><br>（教員）６１％ | 教務課<br>７月(中間)は５２％だったが、今回は６２％に増加した。アンケートでは授業に限定した表現になっているが、その他の学校生活全般での使用（各種アンケート回答やクラスルームを利用しての部活動の連絡等）の機会は増えてきている。授業での使用については教科によって偏りがあるのが現状であるが、互見授業等で、他教科の使用の様子、若手の先生方の使用状況などを参考にして効果的な活用方法を模索していく必要がある。 |
| | ③　生徒の体力向上に努め、たくましい人間づくりに取り組む。 | 【成果指標】（生徒）<br>新体力テストの結果において、前年度の記録を超える生徒が増えている。 | 前年度の自己記録を超えた生徒が<br>Ａ　８０％以上である。<br>Ｂ　７０％以上である。<br>Ｃ　６０％以上である。<br>Ｄ　６０％未満である。 | Ｂ<br><br>新体力テストの結果<br><br>（生徒）７１％ | 体育管理課<br>前年度の自己記録を更新した生徒は、２・３年生合わせて１２４人であり、全体の７１％の生徒が体力合計点数を向上させている。このうちスポーツ科は５０人（６５％）、総合学科は７４人（７６％）であるが、得点の平均点はスポーツ科６５点、総合学科４７点である。来年度に向けて、体育の授業における運動量の確保や活動機会の充実を図っていきたい。 |
| | ④　個々の進路希望に沿って丁寧な支援を行い、確実に進路希望の実現を図る。 | 【成果指標】（生徒）<br>全員の生徒が希望の進路に内定・合格し進路を決定する。 | 進路決定率が<br>Ａ　１００％である。<br>Ｂ　９５％以上である。<br>Ｃ　９０％以上である。<br>Ｄ　９０％未満である。 | Ａ<br><br>進路決定率<br><br>（生徒）100％ | 進路指導課<br>２月末現在で、３年生全員の進路が決定し、進路決定率が１００％となった。進学については、総合型選抜やスポーツ推薦を活用しながら、各自に適した受験方式を選択した。就職については、求人倍率は高かったものの、内定に時間を要するケースが多かった。進学・就職のいずれの進路においても、早期からの意識づけと計画的な準備が重要だと感じた。 |

| 重点目標 | 具体的取組 | 評価の観点 | 達成度判断基準 | 集計結果 | 分析 |
|---|---|---|---|---|---|
| ３　部活動・生徒会活動の効果的、計画的な実践と地域社会と連携した活動の推進および速やかな情報発信（全国大会での上位入賞、地域活動の推進、情報発信） | ①　県内トップレベルの競技力を維持し、全国大会に出場できる各種トレーニングや実技指導を行う。 | 【成果指標】（生徒）<br>全国大会に出場する部活動の数が多い。 | 全国大会に出場した部活動が<br>Ａ　８部以上である。<br>Ｂ　６部以上である。<br>Ｃ　５部である。<br>Ｄ　５部未満である。 | Ｂ<br>全国高校総体に４部（男子柔道、ｳｴｲﾄﾘﾌﾃｲﾝｸﾞ、なぎなた、射撃）、国スポに２部（ﾛｰｲﾝｸﾞ、女子ﾊﾞｽｹ）出場 | 体育管理課<br>昨年度と同様の６部が全国高校総体等に出場した。（外部活動でボクシング競技に１名参加しているが、本校部活動ではないので加算していない。）来年度は８部以上となるよう各部で強化に向けた方策を図るほか、有望な中学生が多数入学してくるよう生徒勧誘にも更に力を入れていきたい。 |
| | ②　部活動を計画的に実施し、科学的な理論に基づき効率的・効果的に生徒の技術向上を図る。 | 【成果指標】（生徒）<br>日々の部活動は計画的かつ科学的で充実していると答える生徒が多い。 | 部活動が計画的かつ科学的で充実していると思う生徒が<br>Ａ　９０％以上である。<br>Ｂ　８０％以上である。<br>Ｃ　７０％以上である。<br>Ｄ　７０％未満である。 | Ｂ<br>１２月教育活動に関するアンケート調査<br>（生徒）８１％ | 体育管理課<br>中間評価後も猛暑や天候の影響によって予定通りの活動ができないことがあった。天候等は予想が困難であるが、臨機応変に対応できるよう計画を見直すとともに、効率の良い指導に心がけ、競技力の向上と安全に配慮した活動となるよう努めていく。 |
| | ③　生徒会執行部の企画力・実行力を育み、活動を充実させるとともに、各種の行事を成功させ、学校生活の充実を図る。 | 【成果指標】（生徒）<br>生徒会活動が活発に行われていると答える生徒が多い。 | 生徒会活動が活発に行われていると思う生徒が<br>Ａ　７５％以上である。<br>Ｂ　６５％以上である。<br>Ｃ　５５％以上である。<br>Ｄ　５５％未満である。 | Ａ<br>１２月教育活動に関するアンケート調査<br>（生徒）８４％ | 生徒会課<br>７月（中間）の８６％からやや数値が下がった。原因として前期に多くの生徒会活動が集中している点もあげられる。後期においても活動が充実するよう、生徒会の生徒とも意見を出し合い、様々な企画や行事を検討していきたい。 |
| | ④　様々な地域活動（ボランティア等）に参加する生徒を増やし、社会貢献の必要性、他者と協働する意識を高める。 | 【成果指標】（生徒）<br>地域活動（ボランティア等）の意義を理解し、様々な地域活動に参加する生徒の数が増えている。 | 様々な地域活動（ボランティア等）に参加したと答える生徒の割合が<br>Ａ　６０％以上である。<br>Ｂ　５０％以上である。<br>Ｃ　４０％以上である。<br>Ｄ　４０％未満である。 | Ｃ<br>１２月教育活動に関するアンケート調査<br>（生徒）４１％ | 生徒会課<br>７月（中間）の３９％から少し上昇してＣ評価となった。学校や学年として取り組んだ活動に対して生徒自身がボランティアをしたという実感を持てていないことも考えられる。生徒への意識面での指導にも取り組んでいきたい。また、生徒会の生徒や部活動単位で外部へのボランティア活動も積極的に行っていきたい。 |
| | ⑤　学校通信（校内、地域）の発行やＨＰ・学校メール配信により部活動や生徒会活動の様子などをきめ細かく発信する。 | 【充実度指標】（保護者）<br>学校からの情報発信内容に対して充実していると感じている保護者が多い。 | 学校のＨＰ・学校通信の内容や学校メールの発信内容が充実していると感じている保護者の割合が<br>Ａ　８５％以上である。<br>Ｂ　７５％以上である。<br>Ｃ　６５％以上である。<br>Ｄ　６５％未満である。 | Ａ<br>教育活動に関するアンケート調査（最終）<br>（保護者）８９％ | 総務課<br>公式インスタグラムおよび各部活動の様子を適宜報告するなどの要因もあってか、昨年度の最終評価の８７％よりも割合が上がった。今後も、ホームページや学校通信また学校メール配信・部活動の結果等で、継続して常に新しい情報発信ができるよう努め、保護者が学校に対し理解する割合を増やしていきたい。 |

| 重点目標 | 具体的取組 | 評価の観点 | 達成度判断基準 | 集計結果 | 分析 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4　教職員の時間外勤務を削減することによる教育活動の充実。（効率的な業務の推進） | ①　教職員のワークライフバランスの実現に向けて、校務の効率化に取り組み、時間外勤務の削減を図る。 | 【努力指標】（教職員）<br>月８０時間以上の時間外勤務のある職員が減っている。 | 月８０時間以上の時間外勤務のある職員の延べ人数が<br>Ａ　０人である。<br>Ｂ（月数×１人)以下である。<br>Ｃ（月数×２人)以下である。<br>Ｄ　Ｃを上回る。 | Ｂ<br>１２月までの９カ月で時間外勤務時間８０時間を超える人数が<br>７人<br>（０．８人/月） | Ｒ５年度最終評価　２．４人/月（２２人/９カ月）<br>Ｒ６年度最終評価　１．１人/月（１０人/９カ月）<br>昨年度のＣ評価から今年度はＢ評価となり、初めて１人/月を下回る結果となった。８０時間を超える教員は固定的であり、部活動指導における県外大会への参加や遠征、校外会場での練習などが主な原因であるためこれ以上の削減が難しい面もあるが、今後も改善に向けて取り組んでいきたい。 |
| | | 【努力指標】（教職員）<br>教職員一人一人がタイムマネジメントを意識した働き方をしている。 | （全教員）タイムマネジメントや業務の効率的な推進を意識した働き方をしていると答えた教職員の割合が<br>Ａ　８０％以上である。<br>Ｂ　７０％以上である。<br>Ｃ　６０％以上である。<br>Ｄ　６０％未満である。 | Ａ<br>１２月の教育活動に関するアンケート<br>（教職員）９５％ | Ｒ６年度最終評価　　８９％<br>Ｒ７年度中間評価　　８２％<br>中間評価では昨年度と比較して割合が減少したが、最終評価では昨年度よりも割合が増加した。多くの職員が意識して仕事の効率化に取り組んでいるといえる。定時退校日だけでなく、２学期以降に行った各課や学年の業務の割り振り方の改善などの取り組みが、日ごろから時間を意識する良い機会となったと考えられる。 |